J.ブラームスのホルントリオをナチュラルホルンで奏する場合の演奏効果
The effect of natural horn on the performance of J.Brahms' Horn Trio Op.40

音楽文化研究科　音楽表現専攻　07-1032　長　田　　麗

本研究の目的は、ヨハネス・ブラームス（Johannes Brahms，1833-1897）作曲の《ホルン三重奏曲作品 40　*Trio für Horn, Violin und Klavier Es-dur op.40*》（1865）のホルンパートを、ナチュラルホルンで演奏することによりどのような効果が生み出せるかを考察することである。

ブラームス自身は、このトリオのホルンパートを古来からの無弁のホルンで演奏することを望んでいた。しかし、この曲が出来上がった 19 世紀半ばには、ヴァルブシステムを備えたヴァルブホルンがかなり定着していた。しかしヴァルブホルンが普及しても、ナチュラルホルンを支持する声が非常に高かったのも同時代の風潮である。その理由として、ベルへの右手の入れ方によって起こる閉塞音と開放音の変化が生み出す音色の変化が失われることが挙げられる。

結果として、まずナチュラルホルンは、その表現方法がヴァルヴホルンとは全く違うと言えた。ヴァルヴホルンでは、全ての音が均一な音色で奏でられるということが大前提にあるが、ナチュラルホルンでは、まず開放で出せる音・出せない音があり、出せない音のコントロール方法（右手を入れる・口でコントロールする）や息の入れ方による音色の変化等、制約がたくさんある。

しかし、その制約をむしろ長所としてとらえると、かえってその制約によって曲の表情が豊かになると感じたのがこの研究の成果である。

このホルントリオにおいて、ナチュラルホルンにおいては不利と思われる転調の多用により、閉塞音の使用が増え、そのことが音楽に緊迫感を与えると同時に、閉塞音が開放音に向かうことにより推進力が増すことが分かった。

また、自然倍音の音程の特徴や、閉塞音のインパクトの強い使い方など、ヴァルヴホルンでは考えられない表現方法でもって音楽に変化をつけることができるのも、ナチュラルホルンで演奏した場合に生まれる効果である。

勿論、ナチュラルホルンでの表現方法をそのままヴァルヴホルンでの演奏に取り入れられるわけではないが、今後はこの研究によって得られた効果をヴァルヴホルンであっても生かせるよう、演奏面での研究を続けたいと思う。